

平成 26 年 6 月 11 日現在

機関番号：13801

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22520237

研究課題名(和文) 中世末の英文学における宗教と医学の共生的関係についての表象文化論的研究

研究課題名(英文) Images of Medicine, Religion and Gender in Late Medieval Society

研究代表者

久木田 直江(KUKITA, NAOE)

静岡大学・人文社会科学部・教授

研究者番号：00271693

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円、(間接経費) 780,000円

研究成果の概要(和文)：1千年に及ぶ西洋中世は、キリスト教を受容・発展させ、キリスト教的価値観を社会の隅々まで浸透させた。西洋中世の文化的・宗教的連続性は近代を経て現代に及んでいる。21世紀の西洋中世文学研究において、文化の多元性、多様性、流動性に目配りし、固定化された認識から抜け出し、柔軟な視点を構築することが必要である。本研究は、病気、健康、生、死などの人間学の問題について、教会の考え方が支配した中世末のヨーロッパ社会に焦点を当て、中世末の宗教と医学・医療の接点を探り、文学作品、宗教書、医学書の新たな読みを提示した。

研究成果の概要(英文)：Preoccupations with the body in the twenty-first century have led to a growing interest in the intersections between literature, religion and the history of medicine, and, more specifically, how they converge within a given culture. This study explores the ways in which aspects of medieval culture were predicated upon an interaction between medical and religious discourses, particularly those influenced by contemporary gendered ideologies. This study interrogates the convergence of religion and medicine broadly in a number of different ways: textually, conceptually, historically, socially and culturally. It argues for an inextricable relationship between the physical and spiritual in accounts of health and illness, and demonstrates how medical, religious and gender discourses were integrated in medieval culture.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学、英米・英語圏文学

キーワード：中世英文学 キリスト教 医学史 ジェンダー 図像学 西洋中世文学

## 1. 研究開始当初の背景

1千年に及ぶ西洋中世は、キリスト教を受容・発展させ、キリスト教的価値観を社会の隅々まで浸透させた。西洋中世の文化的・宗教的連続性は近代を経て現代に及んでいる。21世紀の西洋中世研究は、その全体像を多様な視点から捉え直す機運と共に始まった。文学研究においても、文化の多元性、多様性、流動性に目配りし、固定化された認識から抜け出し、柔軟な視点を構築することが必要である。それは同時に、さまざまな学問領域を視野に入れた包括的研究に、文学研究がいかなる役割を果たしうるかと云う課題を得たことでもある。本研究は、病気、健康、生、死などの人間学的問題について、教会の考え方が支配した中世末のヨーロッパ社会に焦点を当て、中世末の宗教と医学・医療の接点を探り、文学作品、宗教書、医学書の新たな読みを提示した。

## 2. 研究の目的

医学史の泰斗ロイ・ポーターは、人類の生活形態が狩猟や採集を基盤とする遊牧生活から牧畜と農業を行う定住生活に移行したとき、感染症の環境が整ったと語る。畜産と組織的農業によって飢餓から解放された人類であったが、安定した人口の増加と引き換えに、病気との戦いが始まった。その戦いに終わりはない。三十億個の情報を含むヒトの設計書(ゲノム)の解読が可能となり、生物学が精密定量科学に変貌した現在も、人類はトリからヒトへと感染する新型インフルエンザを始め、新たな伝染病の脅威に晒されている。

病気は個人の心身に苦痛を与え、社会生活にも少なからぬ影響を及ぼす。二十一世紀の日本に暮らす私たちは豊かな生活を享受しているが、高度成長期以前、この国においても病気の主な原因は栄養失調、水質汚染などの劣悪な環境にあり、伝染病と隣り合わせの暮らしをしていた。また、自然の猛威がもた

らず災害も、人の健康を大きく揺るがしてきた。その脅威は今も変わることはない。ひとたび天変地異に見舞われると、最先端の科学が生み出す快適な暮らしは突然崩壊する。そのとき、個々人がいかに脆弱な存在になるか、阪神・淡路、東日本大震災をとおして私たちは思い知らされた。現代社会に潜むあらゆる危険や不安を直視するとき、伝染病・飢饉・天災・災害の危険に晒されながら、近代科学の恩恵を受けずに生活を営んだ人びとが、病をどのように捉え、病の治癒や暮らしの改善のために、いかなる手段を講じたかという問いを立てるのは、決して時代錯誤ではないだろう。それどころか、社会構造の変化や価値観の多様化といううねりのなかで個々人の死生観に揺さぶりがかけられている現在、近代医学の大きな柱である西洋医学の伝統を心身の健康という観点から探ることの意味は小さくないと考える。

## 3. 研究の方法

現代の医療人類学を論じる Byron Good は、「各々の社会は独自の方法で疾病経験を解釈する」[*Medicine, Rationality and Experience* (Cambridge, 1994)]と唱えるが、病という経験にいかなる解釈を与えるかは、それぞれの社会や文化と密接に結びつき、そこに多様な言語表現、言説、図像表現が現れる。中世の宗教文学では、身体と魂の結びつき、医学と宗教の接合は顕著である。例えば、初期中英語で書かれた『修道女の手引き』の第6章では、悔悛や苦行と医師による治療が同じ次元で議論され、修道女は身体の癒しの前に魂の癒しを得るよう指導される。また、神秘主義文学では、病が神を視るきっかけとなる場合がある。ノリッジのジュリアンは瀕死の床で、また、マージェリー・ケンプは産後鬱症を患いキリストの幻視を得た。その背景には、あらゆる病気の原因を人間の罪に求めた中世の病因論がある。デカルト以前の社会では、

身体と魂は統一体とみなされ、魂のありかたは身体に影響を与えたと考えられた。中世のキリスト教徒の心性には身体と魂の密接な関係、さらに、医学と宗教の共生的関係が深く浸透していた。

中世英文学と医学の連関については、これまで、文学や医学史の論考における傍証として言及される場合が多かったものの、国外の文学研究では、ジェンダー論と医学の観点による文学研究に先鞭をつけた Elizabeth Robertson の ‘Medieval Medical Views of Women and Female Spirituality in the *Ancrene Wisse* and Julian of Norwich’s *Showings*’, in L. Lomperis and S. Stanbury (eds), *Feminist Approaches to the Body of Medieval Literature* (New York, 1993), pp. 142-67 や医学史の立場で身体論とジェンダー論を融合させた Monica Green の *The Trotula* (Philadelphia, 2001) があり、最近では中世末の文化における外科医の表象を中世文学に探った Jeremy Citrome, *The Surgeon in Medieval English Literature* (New York, 2006)も注目に値する。しかし、宗教と医学の連関を中世英文学に検証する包括的研究は十分に行われていなかった。

本研究は、中世の文化における文学、宗教、社会史、医学、身体論を総合した研究をめざし、キリスト教徒の心性の根底にあるキリストの体（聖体、*Corpus Christi*）へのディヴオーション(devotion)を医学と宗教の共生的関係の中心的表象と位置づけ、西洋中世の心身相関性をキリスト教の文脈で考察し、宗教文学、医学書などから表象文化論的に検討した。その際、病についての解釈を形成する上で、修辞を中心とした言語表現が担った役割に焦点を当て、中世の文学作品における多様な言語、表現、言説を考察するとともに、図像表現や説教などによって ‘a discourse community’ が形成されたことに鑑み、隣接領域を含めた文字テキストと図像的資料を駆

使して研究を行った。

#### 4 . 研究成果

中世末に最も流布した健康規則 (*regimen sanitatis* 養生訓) に関する書物、*Secreta secretorum* (*Secreta*)と *Regimen sanitatis Salerni* (*Regimen sanitatis*) を取り上げた。1348年にペストがイギリスを襲うと、ギリシャ医学を継承した健康規範は身体と魂の健康を保つためのホリスティックな手引書として平信徒の間に急速に広がった。本研究では、ラテラノ公会議以降、告解と聖体拝領による魂のケアが強化され、病者は天上の薬である聖体によって癒されると考えたことの重要性に着目し、キリスト教会の言説が健康規則にどのように融合し、中世末の宗教文学の heteroglossia にいかなる役割を果たしたかを探り、医学と宗教の交差と接合に新たな視座を与えた。*Secreta* と *Regimen sanitatis* の精査は Lydgate や Hoccleve 等の作品を通して行うと同時に、中世医学の写本（たとえば Wellcome Institute Library, Western MS 8004）を調査し、さらに、写本から初期印刷本へと media が変化した 14 - 16 世紀に版を重ねた健康本兼宗教的 道徳書、*Kalendar of Shepherdes* を研究した。

また、宗教文学における霊的治癒の言説については、その根底にある聖体崇拜に注目し、聖体の神学的表象が表出する神秘主義文学を検証した。主なテキストとして、13 - 15 世紀のイギリス神秘主義文学に大きな影響を与えたヘルフタ修道院（北ドイツ）の Mechtild of Hackeborn が著した *Liber Spiritualis Gratiae* (*Liber*)を精査し、霊的治療のテキストとして新たな解釈を試みた。同書は、中世末のカトリシズムが瓦解し、人々の価値観が大きく揺さぶられた 15 世紀初頭に、ラテン語から中英語に *The Booke of Gostlye Grace* と題して翻訳され、多くの読者を得た。*Liber* の特徴は、ミサ、聖体拝領などの教会典礼を軸とする神秘的霊性にあり、そこに医

学と宗教の言説の交差・接合を検証できた。また、同書が多くの女性の読者を得たことは刮目に値する。よって、ジェンダーの観点からも神秘主義文学における医学の言説に取り組み、この分野で先端的研究を行っている研究者の協力を得、国際シンポジウムなどを開催した。

本研究は中世末を中心に身体と医療の文化に関するテキストと図像を読み解き、西洋中世の宗教と医学について考察した。人類の歴史は病との闘いであると言っても過言ではない。ヒトの設計書の解読が可能になり、医療が大きく進展した現在も、人間は新しい伝染病の脅威にさらされ、慢性病にもてあそばれ、治癒の困難な病に苦しんでいる。寿命が延びた先進国でも、病への恐怖は依然として消えることはない。それどころか、人びとの健康意識がいや増すなか、病気に罹患せず、長生きすることが生きる目的にすり替わることさえある。

今日の健康観を、ペストの猛威を経験し、健康への意識が急速に高まった中世末のヨーロッパ社会と比較すると、その特徴がくっきりと浮かび上がる。特に、中世の健康観の特徴が身体と魂の健康にあり、それらの丁寧な管理を健康への道と考えたことは、高度な科学技術の有無にかかわらず、現代の健康観に示唆を与える。

ギリシャ医学は人間を宇宙全体のなかに位置づけ、身体と魂のバランスとハーモニーを提唱した。この健康観が西ヨーロッパに伝播し、魂の健康と死後の救済を結びつけるキリスト教に吸収された結果、「病める人」の身体と魂の全体をケアするホリスティックな医療が行われた。健康の前提となるのは清らかな魂の維持で、告解と悔悛による魂の浄化が重視された。これと並んで奨励されたのはギリシャ医学の体液説に基づく健康管理であった。「六つの非自然」や環境に配慮した健康規範はキリスト教の教えに調和した。

教会は大食などの放縦生活を罪に結びつけ、「六つの非自然」の管理と規則正しい、摂生した生活を促した。特別な医療技術を必要とせず、生活に密着した養生指南は中世をとおして病気の予防や健康管理の基本となったのである。

このような医療は、現代医療の諸問題を映し出す鏡となるのではないだろうか。たとえば、告解による病者の語りや問診が優先される医療の現場では、たとえ教会の強大な力が背景にあるものの、病者と彼らに接する司祭とのあいだに信頼関が築かれていた。病人と時間をかけて話をせず、顔色を観察せず、病人の身体に直接触れることなく、血液の検査データ、CTやMRIなどの画像データ、DNA検査データによって診断が行われることもある現代医療と大きな隔りがある。さらに、宗教をとおして解決を与えることによって心のケアができるという意味で、医療と宗教の共生的関係が社会システムとして機能していた。病を罪の結果とする病因論が根底にあるものの、病は、自然の法則の作り手である神が人間の肉体に刻むメッセージであると理解され、病と治療が新たな自己成型につながる場合もあったのである。そして、死にゆく同胞の魂の旅立ちを見守る「看取り」のシステムがキリスト教会を軸に機能していたことは、臨床宗教家の必要性が議論される今日の医療に示唆を与えるだろう。

西洋中世の医学・医療は、社会構造の変化や価値意識の多様化のなかで、個々人の死生観が問いなおされる今日の社会に対し、決して寡黙ではない。身体と魂のあいだに区別のないケアが行われていた中世医学は人間学的テーマの実践の場であり、そこで機能していた医学と宗教の共生は生死に関する共通感性に導かれ、人間の本性的考察とともに問われるべきであるのだから。

5. 主な発表論文等  
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

Naoë Kukita Yoshikawa, 'The Making of *The Book of Margery Kempe: The Issue of Discretio Spirituum Reconsidered*', *English Studies: A Journal of English Language and Literature*, 92 (April, 2011), 119-37 査読有

〔学会発表〕(計 7 件)

久木田直江、2013年12月 日本中世英語英文学会・第29回全国大会(愛知学院大学)シンポジウム「伝統と再生:15世紀のイギリス文学」講師、報告題目「神秘主義文学における *The Booke of Gostlye Grace* の役割」

Naoë Kukita Yoshikawa, 'Mechtild of Hackeborn as Authority: The Middle English Translation of the *Liber Specialis Gratiae*', at *The Medieval Translator 2013: Translation and Authorities—Authorities in Translation*, Katholieke Universiteit Leuven (11 July 2013)

Naoë Kukita Yoshikawa, 'Mary in the *Hortus conclusus*: Healing the Body and Healing the Soul', at *International Medieval Congress, Leeds 2013* (04 July 2013)

Naoë Kukita Yoshikawa, 'Post-mortem Care of the Soul: Mechtild of Hackeborn's *Liber Specialis Gratiae*', SAMEMES, 2012 Conference in Lausanne: Literature, Science and Medicine in the Medieval and Early Modern English Periods, University of Lausanne (27-29 June 2012)

Naoë Kukita Yoshikawa, 2011年7月 *International Medieval Congress, University of Leeds, UK, Medicine and Religion in Medieval Culture I, II – session organizer*

Naoë Kukita Yoshikawa, [same] 'Heavenly Vision and Psychosomatic Healing: Medical Discourse in Mechtild of Hackeborn's *the Booke of Gostlye Grace*'

Naoë Kukita Yoshikawa, 2010年7月 'The Translation of the *Regimen Sanitatis* into a Handbook for the Devout Laity: A New Look at the *Kalender of Shepherds* and its Context', *Medieval Translator: In Principio Fuit Interpres*, University of Padova

〔図書〕(計8件)

久木田直江『医療と身体の図像学—宗教とジェンダーで読み解く西洋中世医学の文化史』知泉書館、2014年

Naoë Kukita Yoshikawa (ed. with Catherine Innes-Parker), *Anchoritism in the Middle Ages: Texts and Traditions* (Cardiff: University of Wales Press, 2013)

Naoë Kukita Yoshikawa, 'Carmelite Spirituality and the Laity in Late Medieval England', in Innes-Parker and Kukita Yoshikawa (eds), *Anchoritism in the Middle Ages*, pp.151-61.

Naoë Kukita Yoshikawa, 'Post-mortem

Care of the Soul', in Rachel Falconer and Denis Renevey (eds), *Literature, Science and Medicine in the Medieval and Early Modern English Periods* (Tübingen: Gunter Narr, 2013), pp. 157-68

Naoë Kukita Yoshikawa, 'The Translation of the *Regimen Sanitatis* into a Handbook for the Devout Laity: A New Look at the *Kalender of Shepherds* and its Context', in Alessandra Petrina (ed.), *Medieval Translator: In Principio Fuit Interpres* (Turnhout: Brepols, 2013), pp. 303-15

久木田直江「中世医学の図像—心身の相関関係を読む」松田隆美編『貴重書の挿絵とパラテキスト』、慶應義塾大学出版会、2012年、所収、83 - 102 頁。

湯之上隆・久木田直江編『くすりの小箱 - 薬と医療の文化史』南山堂、2011年

久木田直江「天上の薬と世俗の薬—中世ヨーロッパの医療」、湯之上・久木田編『くすりの小箱』南山堂、2011年、所収 96 - 100 頁

〔産業財産権〕

○出願状況(計 0 件)

○取得状況(計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

久木田 直江 (KUKITA, Naoe)  
静岡大学・人文社会科学部・教授  
研究者番号: 00271693